

論文

オランダ人土木技師の顕彰像とその歴史的意義

植村善博

〔抄録〕

Bronze Statues, Busts and Reliefs in Honor of Employed Dutch Civil Engineers and their Historical Significance in Japan

UEMURA Yoshihiro

Four Dutch civil engineers, Doorn, Escher, Mulder and de Rijke who employed by Meiji Government stayed for five years or more longer in Japan, and greatly contributed to government enterprises for flood control and harbor improvement. Ten monuments (bronze statue, bust and relief) of them were erected for thanks to the achievement of public work and benefit of inhabitants of the area.

The ten monuments of Doorn, Escher, Mulder and de Rijke are described these characteristics and processes of erection in this paper.

Each one monument of Doorn, Escher and Mulder were located at Lake Inawashiro, Mikuni Harbour and the Tone Canal where they stayed and worked. But the last seven monuments of de Rijke were located in river basins of Kisogawa (Gifu, Aichi and Nagano Prefectures) and Yodogawa (Shiga and Kyoto Prefectures).

All monuments were erected after 1985 because of the effect of rising of peace movement and international exchange except Doorn's one erected in 1931.

Seven monuments of de Rijke are located in River Kiso and River Yodo, and were erected by Ministry of Construction and its related agencies. After the centenary of modern flood control work of River Kiso in 1987, benefits of achievement of de Rijke had been generally recognized as contributor by the residents. In river Yodo, after the centenary of flood control work in 1974, contribution of de Rijke had been recognized as contributor generally. But there has been no his monument in River Yodo of Osaka Prefecture, because the contribution and respect of Tadao Okino (civil engineer) and Husataro Ohashi (mover of flood control of River Yodo) has been strongly effective.

キーワード オランダ人土木技師、顕彰像、地域貢献、明治期

Keyword : employed Dutch civil engineer, monument, local contributor, Meiji period

I. はじめに

明治政府が推進した近代化や殖産興業・富国強兵の過程においてお雇い外国人の果たした貢献は極めて大きい。とくに、砂防、河川改修、港湾事業の計画作成や指導・監督のためにオランダ人土木技師6名が雇用された⁽¹⁾⁽²⁾。このうち、ドールン、エッセル、デ・レーケ、ムルデルの4名は滞日期間が比較的長く、各地で事業計画の立案や現地での監督に取り組んでいる。彼らの担当した地域ではその貢献が住民らに周知されている場合が多く、その構造物は文化遺産や土木記念物として高い価値をもつ。また、彼らに対する顕彰は記念碑や記念公園整備、復原保存や説明板設置などとして各地で実施されてきた⁽³⁾。とりわけ、銅像やレリーフ（以下ではこれらを合わせて顕彰像とよぶ）の建立は大きな事業であり、立案から事業計画、経費などの条件を満たした場合にのみ可能となる。筆者の調査によれば上記4名のオランダ人土木技師の顕彰像が10件存在する。これらは地域における顕彰活動のシンボルであり、地域史、治水や土木事業の文化遺産としての存在意義は大きい。今日的には災害文化遺産や自然災害伝承碑として、災害軽減や社会教育などの面での活用が望まれる。

本稿ではオランダ人土木技師ドールン、エッセル、デ・レーケ、ムルデルの4名について顕彰像の特徴を記載するとともに日本での活動と地域への貢献を要約する。また、顕彰像の建立過程を検討するとともに地域の特徴と歴史的意義を明らかにする。

II. オランダ人土木技師の顕彰像と顕彰活動

1. お雇いオランダ人土木技師

1879（明治12年）に公雇外国人の国籍はイギリス140名、アメリカ40名、フランス34名、ドイツ30名、ついでオランダ9名であった。また、オランダ人の業種では医学17名、土木14名、語学13名、司薬・化学5名、顧問・書記・通詞5名などとなっている⁽⁴⁾。ところで、土木技師として1872（明治5）年に来日したドールン、リンドウ、翌6年のエッセル、チッセン、デ・レーケ、1879（明治12）年に来日したムルデルの6名が記録されている。彼らの来日から離日までの雇傭期間を図1に整理した。ドールンとリンドウは同時に来日したが、ドールンが約8年に対してリンドウは約3年と短く、またチッセンも約3年間であった。エッセルとデ・レーケは同時に来日したが、前者は約5年間、デ・レーケにいたっては約30年と最も長く滞在している。ムルデルの来日は明治12年と遅いが約10年間滞在した⁽⁵⁾。このようにドールン、エッセル、デ・レーケ、ムルデルの4名は滞在期間が各々約8年、5年、30年、10年と長く、事業計画の立案や現地で指導監督に取り組んでいる。彼らの担当した地域ではその貢献が知られており顕彰活動が行われている。以下、ドールン、ムルデル、デ・レーケ、エッセルの順に彼らの生涯と在日中の活動および顕彰像の特徴についてのべる。

名前(当初の資格)	雇 傭 期 間					
	5年	明治10年	15年	明治20年	25年	明治30年 35年
ファン・ドールン(長工師)	5年2月		13年7月			
エッセル (1等工師)	6年9月		11年6月			
ムルデル (1等工師)		12年3月		23年5月		
リンドウ (2等工師)	5年2月	8年10月				
チッセン (3等工師)	6年1月	9年11月				
デ・レーケ (4等工師)	6年9月					36年6月

図1 オランダ人土木技師の雇傭期間、(5)により編集

2. ドールン Cornelis Johannes van Doorn (1837～1906)

(1) 生涯 オランダ・ヘルダーランド州のブルメン市ハレ出身、デルフトの王立アカデミーに学び技師の資格をえる(図2)。同校の下級生にはエッセルがおり、生涯の友人となった。ジャワにわたり東インド会社の鉄道建設の技師として勤め 1863 年に帰国、鉄道建設や運河開削に従事した。ボードウイン博士により日本政府に推薦され、1872(明治5)年2月にリンドウとともに日本に到着した。政府により長工師(月額500円を支給)として雇傭された。おもに東京にあって各地の事業計画やその審査をおこなうとともにオランダ技師団のまとめ役として重責をはたした。また、技師の増員を政府に要求し、エッセル、デ・レーケら3名が新たに雇傭されている。『治水総論』などを著し、近代河川工学の指導書として日本人技術者らに利用された。1880(明治13)年7月に離日、その後カリブ海アンティル諸島の港湾計画などに従事、



図2 オランダにおける関連地名

さらにハーグでコンクリート会社を興すなど実業界でも活躍、生涯独身で通し 1906（明治 39）年アムステルダムで死去した⁽⁶⁾。

（２）顕彰碑の特徴

①名称：ドールン全身銅像（図 3 ①） 建立年月日：1931年10月14日 場所：会津若松市戸ノ口 日橋川十六橋 建立者：千石貢および東京電燈、製作者：山本白雲



図 3 会津若松市戸ノ口十六橋のドールン銅像

①ドールン銅像 ②渡邊信任顕彰碑 ③ドールン墓碑再建記念碑（2020年 7 月 8 日撮影）

（３）顕彰活動

戊辰戦争後の荒廃した東北地方の開発にあたり大久保利通は仙台湾の築港と士族授産による安積野開発を推進した。宮城県鳴瀬川河口の野蒜築港計画はドールンに委ねられ、築港工事は 1878（明治11）年 7 月に着工した。しかし、1884（明治17）年台風により大破し、結局廃棄された。ドールンは 1878（明治11）年野蒜港工事の指導監督後、同年11月に福島県猪苗代湖を実地調査した。政府は中条政恒の建策を入れ士族授産のため郡山西方の安積野原野を開拓するべく安積（当時は猪苗代湖）疏水計画を進めた。開田に必要な灌漑用水を猪苗代湖に求め、新水路を開削して約4000町歩を開発しようとするものであった⁽⁷⁾。ドールンは南一郎平や伊藤直記らにより作成された図面や分水計画を検討し、その可否を判断するために郡山、猪苗代湖を11月1日～6日に巡視したのである。議論の中心は①日橋川からの会津側への用水権益を保証しつつ新たに取水する方法、②安積野への新たな疏水ルートの決定などである（図 4）。ドールンは11月3日に戸ノ口、4日に山潟に泊り実質 2 泊 3 日の調査であったが、①湖水位の変化量、②日橋川からの排水量調節と水門の設計、③郡山側へ取水するルート、について昼夜勤勉に実地見分した。結局、山潟から五百川へおとす沼上ルートを選んで計画を諾と判断した。翌年 1 月には実測データによる水理計算を示し、十六橋水門の寸法や掘り下げ量、山潟からの疏水断面と水量などを示した計画書を石井省一土木局長に提出している⁽⁷⁾⁽⁸⁾。これにもとづき翌1879

年から工事が開始され、約47.7万円を費やして3年後に竣工した。これは後の琵琶湖疏水計画のモデルになった。1882（明治15）年10月1日の通水式には岩倉右大臣、松方大蔵卿、西郷農商務卿、徳大寺宮内卿など政府重鎮らが参列しており、政府の重要視のほどがうかがえる。安積疏水は農業用水として重視されたが、1898（明治31）年には五百川上流の沼上に郡山絹糸が日本で2番目の水力発電所を建設し、延長24 kmの長距離送電に成功した。このため、郡山に安い電力と豊富な用水を求めて多くの繊維や化学などの工場が進出、郡山市発展の原動力となった⁽⁹⁾。

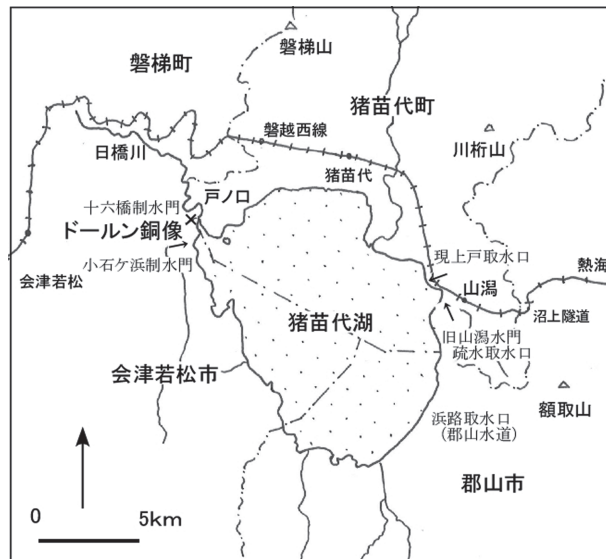


図4 猪苗代湖と関連地名

一方、自然排水路である日橋川は会津盆地の生活、農業用水として近世から重視されてきた。日橋川は同盆地との間を急勾配で流れ下るため水力発電の好適地であり、明治末から大正期に4発電所が設置されている。これに先立って猪苗代湖を訪ねた仙石貢はドーレンの指示による十六橋水門での湖水位の連続観測記録を実見して水力発電事業を興すことを決意したという。1911（明治44）年に猪苗代水力電気を設立し社長に就任した。仙石は鉄道技師として日本や朝鮮で活動、1908年には衆議院議員に当選、電力需要の急増する東京方面へ送電のため猪苗代第一発電所を1914（大正3）年に完成させた。その後も、鉄道院総裁、土木学会会長、南満州鉄道総裁などの重職を歴任した人物である⁽¹⁰⁾。彼は猪苗代湖の水位観測や水門設計などへのドーレンの貢献に敬意を払い偉業を後世に伝えるため、晩年に銅像を建立する活動を推進した。彼の熱意と説得により1923（大正12）年に同社を合併した東京電燈が設立主体、土木学会と安積疏水普通水利組合が賛助者となり1931（昭和6）年10月14日にドーレンの全身像が日橋川の十六橋畔に建立された。本山白雲製作の高さ2.5 mの銅像除幕式には外務、内務、通信、農林

の各大臣による祝辞などが朗読され、最後にオランダ公使パプストが謝辞をのべ、像の横に桐を植樹したという（図5）。土地は水利組合が提供し、費用2.4万円は千石と東電で折半したという。千石は病気のため出席できず、同月30日に死去している⁽¹¹⁾。



図5 ドールン銅像除幕式（1931年）のオランダ公使パプスト、(6)による

太平洋戦争の末期に本銅像をめぐる有名なエピソードが生まれる。当時、敵国人のドールン銅像は軍需供出により消える運命にあった。しかし、1944（昭和19）年に安積疏水組合常任委員の渡邊信任は命を賭して銅像を守り抜く決意を固め、農民らとともに銅像を山林に埋め、憲兵隊の追求をかわしたという。戦後、1946（昭和21）年にこれを掘り出して再建させたが、台座から引き下ろす際に両足が破損していたという。これは鶴見正夫により『かくされたオランダ人』として発表され⁽¹²⁾、テレビでも放映されたため広く周知されるようになる。なお、渡邊は1929（昭和4）年から1957（昭和32）年までの約29年間にわたって疏水組合の事務統括および土地改良区理事長を務め、安積疏水の中心人物として活躍した。特に、水利権が錯綜して紛糾が絶えない中、公平な利用と利権調整のため猪苗代湖利用連盟の結成に尽力している。渡邊

の銅像は安積疏水通水70周年にあたる1952(昭和27)年4月29日に郡山市の疏水組合の敷地に建立された。また、同年に十六橋のドールン銅像の隣にレリーフ像を埋め込んだ頌徳碑が猪苗代湖利用連盟により、さらに上戸浜の元取水口に地区民により功績碑が建てられている。

ところで、1978(昭和53)年アムステルダム市のニューオースター墓地に埋葬されたドールンの墓碑が撤去されて空き地になっていることを郡山市の岡部司氏が確認した⁽¹³⁾。この情報に接した当時の郡山市長や疏水土地改良区の理事長が中心になりドールン墓碑再建委員会が設立され、市民に募金を呼びかけて約3千万円を集めた。ドールンは郡山発展の恩人として市民に敬愛されているのである。こうして1979(昭和54)年6月27日に磐梯山を模した墓碑が同墓地に設置され、郡山市使節団とアムステルダム市長やブルメン市長らが参列して墓前で供養祭が執行された⁽¹⁴⁾。これは郡山市民によるドールンの顕彰と日蘭両国の友好の推進を目的とする事業と位置づけられている。なお、同年10月1日に墓碑と同じ磐梯山を模した再建記念碑と碑誌が十六橋のドールン銅像横に建立されている(図3③)。

その後、郡山市は1987(昭和62)年にドールン生誕百五十周年祭を実施、生地のブルメン市長らも列席した⁽¹⁵⁾。翌1988(昭和63)年にはブルメン市と姉妹都市提携を結び、国際親善活動を継続している。なお、久留米市と1975(昭和50)年に、鳥取市とは2005(平成17)年に姉妹都市提携を行っているが、両市はいずれも明治初期に安積野開拓地に入植した士族らの出身地である。

3. エッセル George Arnold Escher (1843~1939)

(1) 生涯 北部フリースランド州レーワルデンの出身で海軍将校の父をもつ。デルフトの王立アカデミーの第1期生となり土木科卒業、鉄道建設の仕事に従事し後に内務省土木局の技師となる。日本に関心を持ち渡日の機会を求めていた。ドールンによる技師募集の誘いに決意し1873(明治6)年9月にデ・レーケらとともに大阪に到着した。1等工師として前半は大阪に住んで淀川や三国港の調査と計画などに従事、後半は東京に移り山形県から鳥取県までを技術巡回しトンネルや橋梁の設計などもおこなっている。1878(明治11)年7月に離日、帰国後は内務省に復職し活躍、技術職として最高位の技監に就任し1908(明治41)年に定年退職、オランダ国獅子勲位爵位を授与された。1939(昭和14)年96才で死去している⁽¹⁶⁾。5男のマリウスは有名な版画家。

(2) 顕彰像の特徴

②名称 エッセル、デ・レーケ突堤顕彰碑(図6) 2人のレリーフ 2004年9月26日 福井県坂井市三国町宿2丁目 ゆあぽーと前広場 建立者:三国ロータリークラブ、製作者:津谷博子

(3) 顕彰活動

九頭竜川河口に位置する三国(旧阪井)港は北前船の寄港地で福井の外港として繁栄した。



図6 坂井市エッセル、デ・レーケ突堤顕彰碑（2020年7月20日撮影）

しかし、明治初年には九頭竜川の土砂堆積が進み大型船などが出入りできず存亡の危機におかれた。このため、地元豪商らが港湾建設のための調査、改修を強く要請、内務省はエッセルを現地に派遣した。彼は1876（明治9）年5月～7月に九頭竜川を調査して防潮堤と粗朶水制を主とする阪井港修築建議を提出、さらに同年9月～12月に当地に滞在、突堤の長さを半減し工費を約2倍の1.6万円に引き上げる計画修正をおこなった。これには地元民が大いに困惑したという。エッセルは1878（明治11）年6月に帰国したため、その後はデ・レーケが引き継ぎ現地で工事の指揮、監督をおこなっている。これは、右岸に延長約510 mの防波堤兼導流堤を築造し、左岸上流に粗朶沈床を入れて川幅を狭め流速を早くして水力によって土砂を海へ放出するという計画であった⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾。1878年5月24日に着工したが、冬期は天候不良による休業、コレラ感染や工事夫の事故死、暴風波浪による破損など多くの困難に直面している。しかし、1880（明治13）年12月14日に開港式をあげた。その後も破損が生じたため、1882（明治15）年3月古市公威が派遣され、突堤全体の補強工事を実施して同年11月15日に完成した。この突堤は現在も機能しており、2003（平成15）年に国の重要文化財に指定された（図7）。なお、エッセルは三国滞在中に地元の依頼により龍翔小学校の設計をおこなったとされ、1879（明治12）年5月に5層8角の洋風建築が竣工している。しかし、破損がひどく1914（大正3）年に取り壊されてしまった。しかし、約68年後の1981（昭和56）年10月29日に三国町郷土資料館（現みくに龍翔館）として再建され、開館式にはエッセルの孫ジョージやカフマンオランダ大使などが出席している⁽¹⁹⁾。その後、エッセルの帰国時に政府から送られた蒔絵硯箱と文箱を町が親族から購入、1990（昭和65）年7月24日の引き渡し式には孫のハンス氏らが参加、エッセルの三国港への貢献が町民に知られるようになる⁽²⁰⁾。とくに、三国港突堤の国の重要文化財指定を受けて、翌2004年に三国ロータリークラブが創立30周年記念としてエッセル、デ・レーケ突堤顕彰碑を建立、町に寄贈した。碑は長さ7.9 m、高さ2.6 mのコンクリート製で、右は大きな波、左はこれを受け止める突堤を表す。波形の側面にエッセルとデ・レーケのレリーフが貼り付け

であり、オランダ人技師2名が同時に顕彰されている(図8)。なお、同年9月26日の除幕式にはオランダ公使デフリースが挨拶し、国際交流が深まることへの期待、同町長は地域活性化の資源としての活用について述べた⁽²¹⁾。



図7 三国港突堤 (2020年7月20日撮影)



図8 エッセル(右)とデ・レーケ(左)のレリーフ像(2020年7月20日撮影)

4. デ・レーケ Johannis de Rijke (1842～1913)

(1) 生涯 南部のゼーランド州コリンスプラートに港湾事業者の息子として生まれた。築堤や閘門の建設事業に従事しながら、レプレット氏から水理学などを独自に学んだ。かれは学歴こそ低いが現場経験の豊富な優れた技術者となり、北海運河の現場でドールンの知己をえた。1873(明治6)年9月ドールンの推薦によりエッシャーらと来日した。当時、デ・レーケ30才、妻と2人の子供、義妹を伴って新天地での生活を始めた。当初、四等工師(月給300円)であったが、明治17年に一等工師に任じられた。デ・レーケは30才から60才までの生涯の大半を日本の近代砂防および治水、築港など多くの事業を計画、指導、実施に専念して大きな貢献

を果たしたことから「近代治水・砂防の父」とよばれる⁽²²⁾⁽²³⁾。前半は大阪を中心に、1873年～1875（明治6～8）年は淀川下流の低水工事、上流のはげ山の土砂留め堰堤や植林など砂防事業をおこなった。この経験から「治山無くして治水無し」の信念をいだいたといわれる。1878～1881（明治11～14）年には木曾三川の調査と分流計画にあたった。1885（明治18）年から東京に移り内務省土木局で日本各地の計画の審査や指導にあたり、1890（明治23）年のムルデル離日後はただ一人の蘭人土木技師として活躍した。1891（明治24）年には土木系技師の最高位である勅任官に任ぜられている。1903（明治36）年60才で辞職して離日、勲二等瑞宝章を授与されている。帰国後はオランダ政府代表として上海の黄浦江の改修工事を指導することになり、上海に約5年間滞在して1910（明治43）年に帰国した。翌年政府より獅子勲章を授与され貴族に列した。1913（大正2）年アムステルダムにて70才で死去した⁽²⁴⁾。

（2）顕彰像の特徴

- ③名称 木曾三川治水の先駆者 レリーフ（図9①） 1987年4月25日 岐阜県海津市油島千本松原（旧海津郡海津町油島） 建立者：海津町 製作者：斉藤勝弘



図9 ①木曾三川治水の先駆者碑 ②近代治水百年記念碑 ③宝暦治水之碑（2019年1月29日撮影）

- ④デ・レーケ全身銅像（図10） 1987年10月9日 愛知県愛西市立田町福原（旧海部郡立田村福原） 船頭平河川公園 建立者：木曾三川治水百周年記念事業実行委員会 製作者：三枝惣太郎
- ⑤デ・レーケ胸像（図11） 1993年 岐阜県海津市萱野（旧海津郡海津町萱野） 海津市歴史民俗資料館 同歴史民俗資料館展示品 建立者：海津町歴史民俗資料館 製作者：田路雅敏
- ⑥デ・レーケの碑 レリーフ（図12） 1998年10月28日 長野県木曾郡上松町滑川第1砂防堰堤 建立者：上松町、大桑町、南木曾町、山口村、建設省多治見工事事務所、製作者：衣笠文彦



図10 愛西市船頭平河川公園のデ・レーケ銅像 (2019年 1月29日撮影)

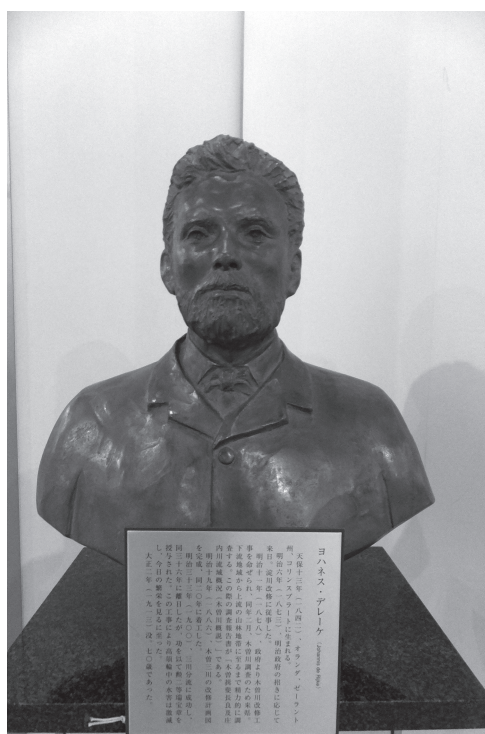


図11 海津市歴史民俗資料館のデ・レーケ胸像 (2019年 6月6日撮影)



図12 上松町滑川第1砂防堰堤のデ・レーケの碑（2019年10月30日撮影）

- ⑦デ・レーケ胸像（図13） 2000年12月 岐阜県海津市南濃町奥条（旧海津郡南濃町奥条）
さぼろ遊学館 建立者：砂防フロンティア整備推進機構、製作者：斉藤典子
- ⑧デ・レーケ胸像（図14） 2000年12月 滋賀県大津市桐生オランダ堰堤 砂防フロンティア
整備推進機構 製作者：斉藤典子
- ⑨デ・レーケ胸像（図15） 2000年12月 京都府木津川市平尾（旧相楽郡山城町） 不動川砂防
歴史公園 砂防フロンティア整備推進機構製作者：斉藤典子

（3）顕彰活動

③と④は1987（昭和62）年の木曾三川近代治水百周年記念事業の一環として実施されたもの。1887（明治20）年内務省はデ・レーケによる三川分流を中心とする木曾三川下流改修計画を採用、国営による実施を決めた。同年4月に土木部長西村捨三や田辺、清水、佐伯ら技師が現地視察をおこない、これを着工式としたとされる。これから100年目にあたる1987年に中部地方建設局が中心になりデ・レーケ顕彰をはじめ多くの事業を実施した⁽²⁵⁾。なお、三川分流工事は日本人技師により実施され、1900（明治33）年3月に一応竣工した。同年4月22日に成功式が海津郡成戸村の堤防で執行されたが、デ・レーケは招かれていない。ここには1923（大正12）年に岐阜県により三川分流碑が建立されている。次いで難工事で知られる背割堤の油島千本松原へ移動して宝暦治水之碑を除幕、薩摩義士の慰霊祭をおこなっている。同地には1938（昭和13）年に薩摩宝暦治水の総奉行平田鞆負を祭神とする治水神社が創建されるなど、宝暦治水の顕彰行事をおこなう聖地として位置づけられるようになる⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾。この宝暦治水之碑の隣に建設省中部地方建設局が近代治水百年記念碑、海津町がデ・レーケと平田鞆負のレリーフを付した木曾三川治水の先駆者の碑を1987（昭和62）年4月25日に建てた（図9）。

⑤は1993（平成5）年4月に開館した現海津市歴史民俗資料館の展示品としてデ・レーケおよび平田鞆負の胸像が製作され、並んで陳列されている⁽²⁸⁾。これは油島の治水の先駆者碑を継承したものと推定される。

⑥長野県木曽郡上松町の滑川砂防公園にデ・レーケの碑が存在する。これは建設省多治見工事事務所を中心に木曽南部直轄砂防事業20周年記念として1998（平成10）年に設置された⁽²⁹⁾。滑川の第1砂防堰堤にデ・レーケのレリーフと碑文を彫った横2m、縦1.2mの記念碑を埋め込んだもので、同年10月28日に地元の小学生らも参加して式典をおこなっている。碑文はデ・レーケが1880（明治13）年8月木曽川上流巡視の際、滑川を経て木曽駒ヶ岳への山道を登って巨大崩壊を観察、記録した巡回日誌の一部から採られている。その後、碑は堰堤前のアーチ形花崗岩板に移された。なお、滑川第1堰堤は高さ22m、長さ300mのコンクリート重力式巨大砂防ダムで1988（昭和63）年に完成したもの。



図13 海津市南濃町さほう遊学館のデ・レーケ胸像（2019年1月29日撮影）

⑦⑧⑨の3件は同一のデ・レーケ胸像で、2000（平成12）年日蘭交流400年記念事業として財団法人砂防フロンティア整備推進機構が製作、寄贈したものである。胸像は同機構が木村基金を活用して事業化、デ・レーケゆかりの4カ所に寄贈し、設置された⁽³⁰⁾。木村基金とは同機構初代理事長木村正昭氏の浄財により砂防に関する研究や諸外国への技術協力と交流に対する助成事業をおこなってきた⁽³¹⁾。まず、デ・レーケの生地であるコリンスプラート市に寄贈された。除幕式は2000（平成12）年5月15日にまちの中心部の像前で約60人が参加して挙行された。同年12月には岐阜県南濃町、滋賀県大津市、京都府山城町の3カ所に寄贈された。南濃町のさほう遊学館は岐阜県が1994（平成6）年6月に土砂災害と闘ってきた羽根谷の砂防を知ってもらうため羽根谷だんだん公園の中に開設した施設である。デ・レーケは1878（明治11）年養老山地から流れ出る羽根谷や般若谷の砂防地を巡視し、植樹や砂防工事を指示、明治21年に竣工した巨石を使った第1砂防堰堤は現存している⁽³²⁾。当地の像には「日蘭友好400周年を迎えるにあたりその記念事業に一環としてデ・レーケの功績を讃え、今後の日蘭友好の発展を祈念して南濃町へ贈呈する 2000年12月」とのプレートが貼付されている。以下の像にも同様の文が付されている。

大津市南部にはげ山で名高い風化花崗岩からなる田上山地がある。同市上田上桐生の草津川支流には1887（明治20）年にデ・レーケが指導し、田辺義三郎技師が設計施工した石積アーチ状のオランダ堰堤があり、胸像も設置されている（図14）。なお、大津市田上森町の天神川上流、迎不動で合流する支流にはデ・レーケと田辺により1889（明治22）年に完成した鎧ダムが現存する。さらに、2000（平成12）年3月には下流の迎不動ダムがオランダ風堰堤として日蘭交流400周年を記念して竣工している。この完成式はオランダの水管理庁デ・フリース副大臣を招いて4月23日に举行され、この際にデ・レーケ胸像の寄贈目録が大津市長に渡されたという⁽³³⁾。山城町の不動川流域はかつて全山はげ山で土砂流失による支流や木津川の河床上昇が大きな課題になっていた。1875（明治8）年にデ・レーケは山地斜面に連束藁網工や苗木植えつけ、谷底に石堰堤などを施行し大きな効果をあげた⁽³⁴⁾⁽³⁵⁾⁽³⁶⁾。これが評判になり、1879（明治12）年には松方正義内務卿、石井土木局長らが視察に訪れ、記念写真を撮った。1988（昭和63）年に京都府は近代砂防の発祥地として不動川砂防歴史公園を整備したが、その一角に胸像が設置されている（図15）。



図14 大津市桐生オランダ堰堤のデ・レーケ像（2019年2月4日撮影）



図15 木津川市不動川砂防歴史公園のデ・レーケ像（2019年2月12日撮影）

5. ムルデル Anthonie Thomas Lubertus Rouwenhorst Mulder (1848～1901)

(1) 生涯 ライデン市で生まれ、デルフトの王立工業専門学校に学び1872(明治5)年に卒業、土木技師の資格を得る。1873～1876年にエジプトのポートサイドへ移り、商館、排水設備、倉庫、宿舍、栈橋の建築などに従事した。帰国後はハーグに住み鉄道設計などに参加していたが、エッッシャーの強い勧誘があり1879(明治12)年3月に来日した。一等工師として東京に滞在しドールンの後任を務め、東京、熊本三角の築港計画、利根川改修計画などを作成した(図16)。1886(明治19)年に任期切れで一時帰国したが、翌10年に再来日し通算約10年間滞在している。多くの港湾や河川改修の調査にあたったが、予算の関係で多くが実施されなかった。現在、彼の指導による熊本県三角西港は重要文化財指定を受け土木建築物を中心に文化景観地区となっている⁽³⁷⁾⁽³⁸⁾。千葉県の利根運河は計画、設計から開削事業の監督にまで関わった。1889(明治22)年デ・レーケとともに勲四等瑞宝章を叙勲(本人は拒否)、翌年5月に離日した。帰国後は結婚してハーグに住みスヘヘニンゲン港の建設などに従事、1897(明治30)年に南東部のナイメーヘンに移住、鉄道設計に当たり1901(明治34)年52才で没したが、子供はなかった⁽³⁹⁾⁽⁴⁰⁾。



図16 熊本県三角西港のムルデル(左)、右は富岡熊本県知事、明治20年頃、(43)による

(2) 顕彰像

③ 名称：ムルデルの碑(図17) 場所：千葉県流山市大字西深井運河水辺公園 建立年：1985年4月28日 建立者：ムルデル顕彰碑建立実行委員会 製作者：立体写真像社。

(3) 顕彰活動 ムルデル顕彰碑の建立に中心的な役割を果たしたのは流山市立博物館友の会である。流山市は1978(昭和53)年に郷土資料館を設置し、「見る資料館から参加する資料館へ」という市民参加の方針を打ち出した。これに呼応して友の会が自発的に組織され、中心的に活動したのが北野道彦(児童文学作家・郷土史家)であった。1978年11月26日に博物館友の会が設立され、当初20数名で活動を開始した。会は順調に拡大し10年後には流山市内のみな

らず野田市、柏市などを含め 500 余名にまで増加した。会報・研究誌の発行、講演会や見学会、展示会、地域調査などの活動を実施し、地域の文化活動を牽引する組織になった⁽⁴¹⁾。とくに、会員による利根運河の研究が進められ、運河の設計から工事施工の指導にあたったムルデルの貢献が高く評価された。北野は 1976（昭和 51）年に『利根運河―利根・江戸川を結ぶ船の道』を出版⁽⁴²⁾、1981（昭和 56）年 12 月流山市の「広報ながれやま」に「利根運河にムルデル碑を」を書き、ムルデルの地域貢献への顕彰とともに国際交流の証としてムルデル碑の建立を訴えた。友の会は 1983（昭和 58）年にムルデル顕彰碑を作ることに決定、翌年 4 月にムルデル碑建立実行委員会が結成され、北野が会長に就任した。市民らによる約 1 年余りの募金活動により約 704 万円を集め、1985（昭和 60）年 4 月 28 日ムルデルの碑の除幕式を挙行了したのである⁽⁴³⁾。友の会を中心とする文化活動のエネルギーと多くの人や組織の協力、援助の結果であるといえよう。当時、建設省と流山市が利根運河水辺公園を計画、整備中であり、建設省江戸川工事事務所により碑の用地が提供された。こうして、ムルデルの碑は運河水辺公園の一角に建てられ、流山市に寄贈された（図 17）。除幕式にはオランダ公使をはじめ千葉県知事、流山市長らが参列、挨拶で北野委員長はこの碑がムルデルの顕彰とともに、日本とオランダの相互理解と友好を増進し、核戦争の危機の下での平和への道を示すとの現代的意義を強調している⁽⁴⁴⁾。また、利根運河の建設とムルデルや地元青年との交流を劇にした約 2 時間の「青年たちの運河」が上演され、地元民から絶賛されたという。なお、利根運河会社により 1908（明治 41）年に建立された利根運河碑が 1987（昭和 62）年にムルデル碑の横に移されている。



図17 流山市のムルデルの碑（2020年7月10日撮影）

ところで、北関東や東北・北海道の物産は江戸期に舟運により利根川中流の関宿から江戸川を經由して江戸へ輸送されていた。幕末～明治前期に鬼怒川との合流付近で土砂堆積が進み船の航行が困難になったため、流山付近でショートカットして利根川と江戸川を結ぶ新運河が利根運河である⁽⁴⁵⁾⁽⁴⁶⁾。茨城県からの強い建議により 1884（明治 17）年にデ・レーケが現地を調査、

翌年にムルデルが調査結果にもとづき約8.5 km の利根運河計画書を提出した。しかし、財政的理由から政府の動きがないため、元北相馬郡長広瀬誠一郎、元茨城県令人見寧、色川誠一らが利根運河会社を設立、完成させたものである。1888（明治21）年 7 月江戸川口、深井新田の運河会社でムルデルも出席して起工式をあげ、延べ200万人の労力と57万余円を要して2年後の1890（明治23）年 5 月10日に完成した。これは琵琶湖疏水開通式（4月9日）の1ヶ月後である。ムルデルは現地に滞在し、内務省技師近藤仙太郎らとともに約2年間工事を監督、指導している。6月18日の竣工式には山県総理、西郷内務卿、芳川文部卿、東京・千葉・茨城各知事らが出席しており、政府の強い支持があったことを示す。ムルデルは任期を終え帰国途中のため出席していない。運河は明治後期から大正期が最盛期で年間約3.8万隻、一日約100隻にも達した。大正12年の関東大震災では鉄道が不通になったため、救援者や救援物資が利根運河により東京方面へ輸送され、救援と復旧に大きく貢献した（図18）。しかし、鉄道網や道路の整備により物資運送が奪われ、洪水による運河の被災などにより運河会社の経営は厳しさを増していった。1941（昭和16）年洪水による深刻な被害を契機に国は利根川の洪水分流を名目に同社を21.6万円で買収した。これにより輸送路としての機能は失われた⁽⁴⁷⁾。戦後の高度成長期には水道用水を利根川から揚水する水路となった。現在では、拡幅と浚渫をおこなって洪水調節作用をもつとともに運河水辺公園が整備され市民の憩いの場ともなっている。

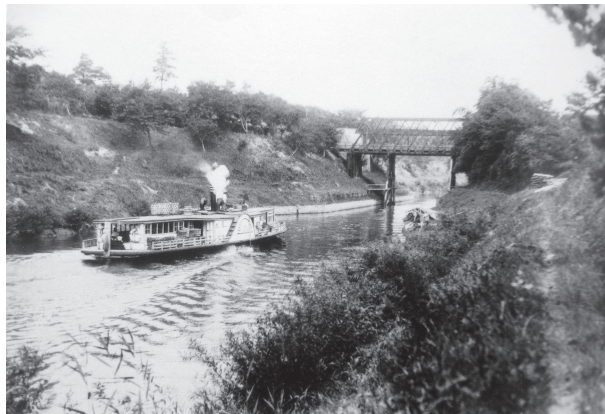


図18 大正4年頃の利根運河と銚子丸、(46) による

Ⅲ. 考察

1. 顕彰像の分布と建立者 オランダ人土木技師ドールン、エッセル、デ・レーケ、ムルデルの4名について顕彰像が10件存在する。それらの調査結果を表1に整理した（番号は本文および図19、表1と一致する）。ドールン顕彰像は福島県猪苗代湖、エッセルは福井県三国港、ムルデルは千葉県の利根運河に各1件が位置する。一方、デ・レーケは中部と近畿に合計7件が

表1 オランダ人土木技師の顕彰像（番号は本文および図19と一致する）

番号	設置年月日	形態	場所	設置理由	設置者	製作者
1	1931年10月14日	ドールン全身銅像	福島県会津若松市戸ノ口十六橋	安積疏水顕彰	千石貢・東京電燈	本山白雲
2	1985年4月28日	ムルデルレリーフ	千葉県流山市東深井利根運河水辺公園	利根運河顕彰	ムルデル顕彰碑建立実行委員会	立体写真像社
3	1987年4月25日	デ・レーケレリーフ	岐阜県海津市油島千本松原	木曾三川治水の先駆者	岐阜県海津町	斉藤勝弘
4	1987年10月9日	デ・レーケ全身銅像	愛知県愛西市立田町福原船頭平河川公園	木曾三川治水百周年記念	同左記念事業実行委員会	三枝惣太郎
5	1993年5月	デ・レーケ胸像	岐阜県海津市海津市歴史民俗資料館	歴史民俗資料館の展示品	岐阜県海津町	田路雅敏
6	1998年10月28日	デ・レーケレリーフ	長野県木曾郡上松町滑川第1砂防堰堤	直轄砂防20周年記念	多治見工事事務所、他4町村	衣笠文彦
7	2000年12月	デ・レーケ胸像	岐阜県海津市南濃町奥条さばう遊学館	日蘭交流400周年記念	砂防フロンティア整備推進機構	斉藤典子
8	2000年12月	デ・レーケ胸像	滋賀県大津市桐生オランダ堰堤	日蘭交流400周年記念	砂防フロンティア整備推進機構	斉藤典子
9	2000年12月	デ・レーケ胸像	京都府木津川市平尾不動川砂防歴史公園	日蘭交流400周年記念	砂防フロンティア整備推進機構	斉藤典子
10	2004年9月26日	エッセル、デ・レーケレリーフ	福井県坂井市三国町宿2丁目ゆあぽーと前広場	三国港突堤顕彰	三国ロータリークラブ	津谷博子
11	2000年5月15日	デ・レーケ胸像	オランダ、コリンズプラート	日蘭交流400周年記念	砂防フロンティア整備推進機構	斉藤典子

存在する（図19）。これらの場所は彼らが従事した事業の現場と一致する。ドールンは1882（明治15）年に通水した安積疏水と猪苗代湖の水利利用への貢献、エッセルは1880（明治13）年開港した三国港の修築事業、ムルデルは1890（明治23）年に完成した利根運河の設計と監督が顕彰されたものである。一方、デ・レーケは木曾三川の分流計画に関わって岐阜県に集中するとともに、砂防工事を指導した岐阜県、長野県、滋賀県、京都府に存在する。ドールン顕彰は猪苗代発電に関係した千石貢と東京電燈、ムルデルは流山市を中心とする市民の文化活動団体、エッセルは三国ロータリークラブにより建立された。一方、デ・レーケは中部地方建設局や多治見工事事務所、砂防フロンティア整備推進機構など建設省とその関係機関により顕彰されている。ここに顕彰主体が東の民に対して西の公という著しい相違点がある。その最大の理由はデ・レーケ顕彰が建設省とその関係機関により強く推進されたからである。

2. 時代背景 オランダ人技師顕彰像の出現は1980年代後半以後であり、比較的新しい点に特徴がある。地域社会で古くから顕彰され伝えられてきたものではない。すなわち、第二次大

戦後の国際交流や平和運動などが高揚した時代に始まったといえよう。唯一の例外は1931（昭和6）年のドールン像である。二次大戦前の建立は猪苗代電力の千石貢の強い意志によるところが大きい。銅像は取水口のある山潟ではなく、発電利用が盛んな日橋川の十六橋に設置された⁽⁴⁸⁾。これは日橋川に依存する発電事業との関連が強いことを示す。本像の除幕式にオランダ公使パブストが参列しており、江戸期からの長い日蘭交流と第二次大戦前の両国の友好関係を反映したものとして注目される。なお、十六橋畔はドールン像をはじめ皇族の植松碑、湖面低下工事碑など多くの記念碑が集中しており、猪苗代湖の水利用に関する聖地となっている。一方、郡山市では安積疏水による農地開発および用水と電力により工業都市として躍進を遂げたことから、ドールン顕彰および日蘭友好に積極的に取り組んできた。1979（昭和54）年10月1日には市民からの寄付金によりアムステルダム市の墓地にドールン墓碑を新たに設置した。また、ドールンを仲介として生地ブルメン市と郡山市とが姉妹都市として国際交流を続けている。

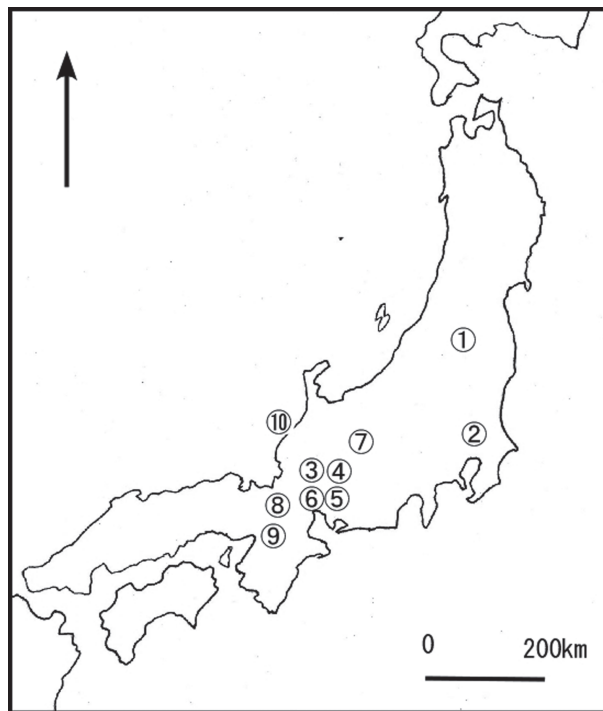


図19 オランダ人技師顕彰像の分布（番号は本文および表1と一致する）

エッセルは三国港再建計画で防潮堤などの調査設計を担当、後にデ・レーケが現地で指揮監督して完成させている。現存する防潮堤はエッセル、デ・レーケ突堤とよばれ、地元三国ロータリークラブが2004（平成16）年に両名を顕彰するレリーフと記念碑を建立している。同地の丘上にはエッセルが設計したと伝わる5層8角の洋風建築である龍翔館が再建されており、防潮堤とともに文化遺産としてまちのシンボルとなっている。

ムルデルの顕彰は千葉県流山市立博物館友の会がおこなった利根運河の研究や住民活動に起因している。これまで忘れられていたムルデルと彼の運河建設への貢献を高く評価した北野道彦が顕彰碑建立を市民に訴え、流山市をはじめ柏、野田両市の市民を巻き込んだ地域運動により建碑が実現されたのである。当時、運河公園の計画中であり、建設省や流山市の協力を得やすい時期に一致したことも無視できない。1985（昭和60）年4月28日の除幕式の北野の挨拶にある通り、本碑はムルデル約10年間の日本での功績とともに、日本とオランダの相互理解と友好の増進そして米ソ冷戦下における核戦争の反対と平和のシンボルとしての市民精神が強く反映されている⁽⁴⁹⁾。以上3件は民間団体や個人の意志により建立されている。

一方、デ・レーケ顕彰像は1987（昭和62）年に建設省中部建設局が木曽三川治水百周年記念事業として実施、建立したものが嚆矢である。同年4月海津市油島の千本松原に中部地方建設局が記念碑および海津町が治水の先駆者、平田靱負とデ・レーケのレリーフ碑を建立した。同地には1900（明治33）年建立の宝暦治水之碑、1938（昭和13）年に平田靱負を祭神として創建された治水神社が鎮座しており、薩摩義士顕彰の聖地となってきた。そこに新たに2つの碑を建て聖地の強化をはかったといえる。同年10月デ・レーケ全身像が船頭平開門横の広場に設置され、さらに同10月には油島に国営木曽三川公園が開園、船頭平に治水資料館の木曽川文庫が開設、下流長島町横溝蔵に明治改修着工之地を建碑、源流域の南木曽町大崖砂防公園の開園など本事業の総仕上げがおこなわれている⁽⁵⁰⁾。

また、顕彰事業の前提としてデ・レーケに関する組織的研究が1984（昭和59）年から開始された。井口昌平を会長とするデ・レーケ研究会が結成され、その成果は1987（昭和62）年デ・レーケ銅像除幕式に合わせて発行された『デ・レーケとその業績』⁽⁵¹⁾に集約されている。

その6年後の1993（平成5）年5月に開館した輪中の文化と高須藩の歴史を展示する海津町歴史民俗資料館にデ・レーケと平田靱負の胸像が並んで展示された。1973（昭和48）年の高須輪中の調査によると、平田靱負を周知している住民が86%に達したが、デ・レーケを知るものは1%に過ぎなかったという⁽⁵²⁾。輪中地域で治水といえば平田と薩摩義士との認識が浸透していたが、百周年事業によりデ・レーケが平田とならぶ治水貢献者として新たに認知されたことの反映といえよう。なお、薩摩義士の顕彰は桑名郡戸津村の西田喜兵衛により1889（明治22）年頃から開始され、油島の宝暦治水之碑建立（1900）、養老町大巻の薩摩役館跡に平田終焉地碑（1928年）および平田像の建立（1934年）、そして1938（昭和13）年油島の治水神社創建によって戦前期の顕彰のピークを迎えた。なお、薩摩役館跡には1989（昭和64）年新たに平田靱負像が設置され、1995（平成3）年に旧平田町須脇の平田公園に平田の銅像が建てられている。

長野県上松町滑川の第1砂防堰堤に木曽川上流直轄砂防20周年記念としてデ・レーケ碑が1998（平成10）年10月に設置された。これは建設省多治見工事事務所が中心に推進したもので、2年後に予定される日蘭交流400周年記念事業を意識したものであろう。

2000（平成12）年は全国規模でデ・レーケの顕彰が展開された特筆すべき年である。すなわ

ち1600（慶長5）年4月19日に蘭人ヤン・ヨーステンらを乗せたオランダ船リーフデ号が臼杵湾に漂着して以来400年間にわたる日蘭交流を記念するものであった。2000年4月21～23日大阪市のデ・レーケシンポジウムと長柄地区河川公園の開園、5月13日岐阜県海津町で記念フォーラム「中部の治水砂防と蘭人技師デ・レーケ」、5月コリンスプラート市に胸像を寄贈、同月23日には天皇皇后両陛下のオランダ訪問、10月7日富山市でシンポジウム「デ・レーケと常願寺川」などの行事が挙行された⁽⁵³⁾⁽⁵⁴⁾。2000（平成12）年はデ・レーケの砂防と治水への貢献を掘り起こし顕彰する事業の年となった。そして、砂防フロンティア整備推進機構が木村基金によりデ・レーケの胸像を製作、生誕地コリンスプラート市、南濃町羽根谷川の砂防ゆうがく館、大津市桐生の草津川のオランダ堰堤、山城町不動川の砂防歴史公園とゆかりの4地点に寄贈した。以上のように、デ・レーケの顕彰像はすべて建設省とその関連団体により実施された。一方、デ・レーケが最初に取り組んだ1874（明治7）年淀川網島での粗朶沈床の試設以来100年目となる1974（昭和49）年に近畿地方建設局が淀川100年記念行事をおこなっている。この年、淀川河川公園の開設、淀川堤防上20カ所に史蹟名勝の石碑と滋賀県田上に砂防百年記念碑を建てた。交響幻想曲「淀川」の初演もおこなっている。そして、『淀川百年史』の刊行によりオランダ人技師らにより取り組まれて以来の近代治水事業を総括した⁽⁵⁵⁾。本書においてデ・レーケの取り組みと貢献が初めて詳しく紹介されたが、記念行事などにデ・レーケの名はほとんど登場しない。

3. 日本人技師との関係

オランダ人土木技師の活躍と地域への貢献が各地で行われてきた。しかし、大規模土木事業は彼らだけで実施できるものではなく、日本人技師らによる協力が不可欠であった。つぎに両者の関係と顕彰について比較検討をおこなう。

安積疏水についてドールンの調査に際して南一郎平らによる調査と地図、計画案が検討された。そしてドールンが決断した沼上ルートによる疏水工事計画は1879（明治12）年に内務省勧農局の山田寅吉により完成され、これをもとに事業が開始された⁽⁵⁶⁾。エッセルは三国港改修計画を作成した直後に後帰国した。このためデ・レーケが現場で指揮監督して完成させた。ここには日本人技師らの関与は不明だが、地元の豪商らが工事費の3.6割を負担して完成されたのである。

ムルデルによる利根運河計画が提出されたが政府は着工しなかった。そこで運河の必要性を痛感した地元の人見寧、広瀬誠一郎らが熱心な活動をすすめて利根運河会社を設立、資金を集めた。開削工事は1888（明治21）年5月に開始され、約57万円と約200万人の労力を費やして1890（明治23）年2月に通水、完成した。運河会社の人見や広瀬の熱意とムルデルと一緒に監督にあたった内務省技師近藤仙太郎らの協力なしには完成できなかったであろう。

一方、木曾三川におけるデ・レーケの活動は、三重・岐阜両県の要請に応じて1878（明治

11) 年2月現地調査を開始、以後8年間に約10回にわたる踏査を繰り返している。そして、三川の分流合流状況を根本的に改める三川分離計画を提案した。また、上流における植林や土砂留堰堤の設置が不可欠と判断している。さらに清水済および佐伯敦崇両技師の協力を得て1886（明治19）年に改修計画を完成させた。工事は翌年に着工、1900（明治33）年の成功式をはさんで1912（明治45）年まで25年間に要した。工事は日本人技師らによる指揮監督でおこなわれ、デ・レーケは成功式に招かれていない。戦前期にはデ・レーケの貢献への言及はほとんどなく、成戸堤防上に1923（大正12）年建立された三川分流碑文に「六年官蘭人測勘地勢規画工程一六年測勘完成一九年工程決定二十年四月開工脩治三川…」と記されるのみである⁽⁵⁷⁾。

デ・レーケは1874（明治7）年以降、淀川改修や大阪築港計画に深く関わり、1887（明治20）年淀川改修計画、1893（明治26）年築港計画意見書を提出している。一方、1890（明治23）年第4区土木監督署長となった技師沖野忠雄はデ・レーケの計画に大幅な修正を加えた淀川高水防禦工事計画意見書を1894（明治27）年に提出した。これに準拠した淀川改良工事が1896（明治29）年帝国議会を通過、翌年に起工した⁽⁵⁸⁾。沖野は1911（明治44）年の完了までの15年間にわたって指導監督に当たっている。ここでもデ・レーケが工事に直接関わることはなかった。1909（明治42）年に毛馬開門広場に淀川改修紀功碑が建立され、碑文には沖野の貢献を「以称神禹之功」として賞賛して沖野を神格化している⁽⁵⁹⁾。一方、デ・レーケらオランダ人技師への言及は全くない。さらに、沖野の13回忌にあたる1935（昭和10）年12月に大阪土木出張所を中心とする記念像建設実行委員会が沖野の胸像を毛馬の紀功碑横に建立している⁽⁶⁰⁾。一方、大阪放出村出身の大橋房太郎は淀川治水と淀川改修事業実現のための活動に没頭、その実現に大きく貢献した⁽⁶¹⁾。大橋の顕彰は四条畷神社における1923（大正12）年の「大橋房太郎君紀功碑」と「治水翁碑」に代表される。前者は大阪府知事や大阪市長を中心とする官民有志、後者は大阪緑藍会など市民らによる顕彰が中心である。大橋を治水翁と賞賛、碑文には「是頡頏神禹功」と記し神格化をはかっている⁽⁶²⁾。沖野と大橋は淀川治水の2大貢献者であり、前者が公、後者が民により顕彰され神格化がはかられた点は注目すべきであろう。なお、枚方市の淀川資料館には両者の胸像が展示されている。これに対し、戦前期にデ・レーケは忘れられた存在であったといえよう。1974年に実施された淀川100年記念事業と『淀川百年史』⁽⁶³⁾および1987年の『デ・レーケとその業績』⁽⁶⁴⁾によって全業績やオランダ人技師の貢献が掘り起こされ周知されたといってよい。しかし、伏見から大阪湾までの淀川にデ・レーケの顕彰像は存在しない。これには沖野および大橋の2大治水貢献者への強い崇敬が今日まで継続していることの反映であろう。

IV. まとめ

1) 明治前期にお雇いとして来日したオランダ人土木技師6名のうち、ドールン、エッセル、

デ・レーケ、ムルデルの4名の顕彰像が存在する。ドールン、エッセル、ムルデルの顕彰像は各1件、デ・レーケは7件で計10件が存在する。全身銅像はドールンとデ・レーケの2件のみ、胸像はデ・レーケのみで4件、残り4件はレリーフである。

2) オランダ人技師の顕彰像はすべて1985年以降に建立され比較的新しい。唯一の例外は千石貢らによる1931年のドールン銅像である。高度成長期後の平和と国際交流運動が興隆した1980年代以降に彼らの顕彰が開始されたといえる。2000年の日蘭交流400年記念事業はそのピークをなすが、今日までオランダと交流を継続しているのは郡山市のみである。

3) 7割をしめるデ・レーケの顕彰像は砂防と治水事業に取り組んだ中部・近畿にあり、いずれも建設省とその関係機関により建立、顕彰されたものである。1987年の木曽三川100年記念事業でデ・レーケの貢献が高く評価され、宝暦治水の平田靱負とともに輪中地域の住民にもようやく周知されるようになった。一方、1974年の淀川100年記念事業ではデ・レーケの淀川での業績は評価されたが顕彰行事などはなく、現在まで淀川に彼の顕彰像は存在しない。これには沖野忠雄と大橋房太郎への強い尊敬が今日まで続いていることによると考えられる。

〔謝辞〕

本研究の端緒は2019年10月岐阜県海津市で開催した「第7回全国禹王サミット in 海津」のため同市内を調査中、多くのデ・レーケや平田靱負の銅像に出会い、その意味に関心を持ったことであった。サミット開催に全面的な協力と支援をいただいた海津市松永清彦市長、同歴史民俗資料館大倉光好前館長と水谷容子学芸員に心より感謝します。また、調査にあたり以下の皆様および諸機関から指導や資料提供をいただきました。相原正義、秋山晶則、井上公夫、上原康生、久保田稔、長澤均、安中正夫、岩浪正人、田路雅敏、根本和俊の各氏、郡山市役所国際政策課、安積疏水土地改良区、利根運河交流館、木曽川下流河川事務所、多治見砂防国道事務所、上松砂防事務所、木曽川文庫、海津市歴史民俗資料館、みくに龍翔館、淀川資料館、宇城市教育委員会。記して厚く謝意を表します。なお本文中では人名の敬称を省略したことを了解いただきたい。

本稿を本年度古稀を迎えられた青山忠正先生および今堀太逸先生に献呈いたします。

〔注〕

- (1) 梅溪昇 (1968) 『お雇い外国人 ①概説』、253p、鹿島研究所出版会
- (2) 村松貞次郎 (1976) 『お雇い外国人 ⑤建築・土木』、203p、鹿島出版会
- (3) 河野實 (1999) 『日本の中のオランダを歩く』、184p、彩流社
- (4) 梅溪昇 (2010) 明治初期におけるお雇いオランダ人、『お雇い外国人の研究下巻』、230～256、青史出版
- (5) 木曽川下流工事事務所 (1987) 『デ・レーケとその業績』、233p
- (6) ファン・ドールン先生銅像建設会 (1932) 『ファン・ドールン先生』、39p
- (7) 安積疏水百年史編さん委員会 (1982) 『安積疏水百年史』、927p

- (8) 藤田龍之・根本博（1991）猪苗代湖疏水（安積疏水）に関するファン・ドールンの業績に対する検討、土木史研究、11、219～228
- (9) ファン・ドールン生誕150年記念事業実行委員会（1987）『郡山市と安積疏水』、81p
- (10) (6) に同じ
- (11) (6) に同じ
- (12) 鶴見正夫（1974）『かくされたオランダ人』、150p、金の星社
- (13) 岡部司（1978）『虹の詩 ファン・ドールン墓碑再建取材調査報告書』、63p
- (14) ファン・ドールン墓碑再建委員会（1980）『ファン・ドールン墓碑再建』、101p
- (15) ファン・ドールン生誕150年記念事業実行委員会（1987）『ファン・ドールン生誕150年記念事業報告書』、79p
- (16) 龍翔館編（1990）『蘭人工師エッセル日本回顧録』、254p
- (17) 三国町史編集委員会（1983）土木工事の発達、『修訂三国町史』、676～688
- (18) みくに龍翔館（2004）『明治三大築港展 図録』、48p
- (19) 「広報みくに」210号、1981年12月
- (20) 「広報みくに」315号 1990年9月、ただし、龍翔小学校の設計には主に柳自治関わったという意見もある
- (21) 「日刊県民福井」2004年9月27日
- (22) (5) に同じ
- (23) 上林好之（1999）『日本の川を甦らせた技師デ・レーケ』、350p、草思社
- (24) (5) に同じ
- (25) (5) に同じ
- (26) 羽賀祥三（2005）宝暦治水工事と〈聖地〉の誕生、名古屋大学付属図書館研究年報、3、75～102
- (27) 海津市歴史民俗資料館（2012）『今、宝暦治水に学ぶこと―史実と顕彰の歩みをたどる―』、11p
- (28) 海津町歴史民俗資料館（1993）『海津町歴史民俗資料館 図録』、63p
- (29) 多治見工事事務所（1999）『木曾南部直轄砂防事業20周年史』、153p
- (30) 上林好之（2000）日蘭交流400年とデ・レーケ、砂防と治水、135、20～24
- (31) 砂防フロンティア整備推進機構（2000）木村基金とは、砂防、36、16～18
- (32) 南濃町役場（1993）『砂防に挑んだ人たち』、72p
- (33) (30) に同じ
- (34) 上田正昭監修（1987）デレーケの砂防工事、『山城町史本文編』、839～848
- (35) 上田正昭監修（1990）近代砂防工事への模索、『山城町史史料編』、893～924
- (36) 楠善雄解説（1976）『土木工要録（付録）』、191p + 56p、恒和出版
- (37) 山本鉦太郎（1984）利根運河建設技師メルデルを三角に追って、におどり、17、6～13
- (38) 宇城市教育委員会（2014）『三角浦の文化的景観 調査報告書保存計画書』、152p + 45p
- (39) 北野道彦（1982）利根運河の建設監督者メルデルに関する新資料、におどり、10、2～4
- (40) 田中則雄（1984）メルデル来日の背景と彼の評価、におどり、18、2～5
- (41) 北野道彦賞選考委員会編（2008）『東葛の文化と北野道彦賞』、253p
- (42) 北野道彦（1976）『利根運河―利根・江戸川を結ぶ船の道―』、193p、崙書房 本書は後に北野道彦・相原正義（1989）『新版利根運河』、230p、崙書房として改訂、出版された
- (43) 記念誌・絵はがき作成委員会編（1985）『メルデル顕彰碑建立記念誌』、88p
- (44) (43) に同じ
- (45) 川名晴雄（1971）『利根運河誌』、128p、崙書房
- (46) 流山市立博物館（2010）『利根運河120年の記録―魅力ある土木遺産―』、109p
- (47) 青木更吉（2018）『歴史ロマン利根運河』、149p、たけしま出版
- (48) 福島県 『猪苗代湖 総合管理計画』

- (49) (43) に同じ
- (50) 高橋直服 (1995) 『宝暦治水薩摩義士顕彰百年史』、223p
- (51) (5) に同じ
- (52) 伊藤安男 (1987) 木曾川改修百年と蘭人デ・レーケ、郷土研究岐阜、48、2～5
- (53) 永田雅一 (2000) 日蘭交流400周年について一近畿地建の取り組み一、砂防と治水、132 63～64
- (54) 建設省中部地方建設局 (2000) 中部地建内における日蘭交流400周年記念行事、砂防と治水、132、61～62
- (55) 淀川百年史編集委員会 (1974) 『淀川百年史』、1821p、近畿地方建設局
- (56) (7) に同じ
- (57) 海津町 (1984) 河川改修『海津町史通史編下』、117～156
- (58) 土木学会土木図書館委員会編 (2010) 『沖野忠雄と明治改修』、714p、土木学会
- (59) 大脇良夫・植村善博編 (2013) 淀川改修紀功碑 『治水神禹王を訪ねる旅』、128～129、人文書院
- (60) 沖野忠雄・坂本助太郎両君記念像建設実行委員会 (1936) 『沖野忠雄坂本助太郎両君記念像建設事務並会計報告』、73p
- (61) 小川清 (2010) 『淀川の治水翁 大橋房太郎伝』、186p、東方出版
- (62) 大脇良夫・植村善博編 (2013) 大橋房太郎君紀功碑、治水翁碑 『治水神禹王を訪ねる旅』、122～125 人文書院
- (63) (55) に同じ
- (64) (5) に同じ

(うえむら よしひろ 佛教大学名誉教授)

2020年10月22日受理

